

空が昼間の明るさを失いはじめた頃、私とウィンは洛絨牛場にたどり着いた。おかしな観光施設など建てられていないか不安だったが、牛場の景色は当時と全く変わっていませんでした。三年前に私達が泊まったテントが、掘っ立て小屋に変わっている外はすべて以前のままだ。

ただ、あれほど思い焦がれてやってきた^{ルオロンニコウチャン}洛絨牛場はなんだかひどく寂しい感じがした。前回訪れた時には野を埋めつくすほど咲き乱れていた高山植物の群落は既に季節が終わってしまったらしく、夕暮れ間近の時刻だったためか旅行者の姿も見当たらず、人気の無い湿原は薄暗くガラーンとして緑の牧草が広がっているだけだ。天候に恵まれさえすれば目の前に素晴らしい姿をみせている^{ヤンマイヨン}筈の「央邁勇」も厚い灰色の雲に包まれていた。

ウィンはだいぶ疲れているのか口数も少なくグッタリしたように座り込んでいる。私は彼女をそのまま休ませておいて、掘っ立て小屋に宿泊の交渉に向かった。先ほどすれ違った旅行者の女性は頼んでも無駄だと言っていたが、こんな場合は外国人がたどたどしい言葉でお願いする方が断然有利な気がしていたので、私は楽観していたのだ。

宿の方に向かって歩いていると、明らかに村人ではない様子の男が歩いてきた。警察官のような制服を身に付けて、腕には管理局と書かれた赤い腕章をつけている。

「你好！！今日牛場に泊まりたいんだけど宿はあるかしら？」

「宿は一週間前に閉まってる。ここに宿は無い」

「でも、私達ここまで来ちゃったのよ。もう夕方だしどうすればいいの!？」

「沖古寺にもどきなさい」

男はアッサリと言った。

冗談じゃないよ。山のような荷物を背負ってここまで半日かけて歩いてきたのに、沖古寺に戻るなんて!!強欲そうな女将の顔が目には浮かんできた。いったいこの男は何なのだろう。高圧的な話し方にムツとした私はわざと反動的な態度で言った。

「今更あそこまで戻るなんて嫌よ!!じゃあ野宿するわ!」

「野宿は禁じられている。とにかく沖古寺に戻きなさい」

これ以上この男と話しても時間の無駄のようだった。

その後の会話を適当にやり過ごすと、男が去っていくの

を見届けてから、私は再び掘っ立て小屋に向かった。小屋の煙突からトロトロと煙が昇っているのをみると心がなごんだ。あ〜、早く荷物を降ろしてストーブの脇でくつろぎたいな。

小屋の扉を叩くと背の低い木こりのような風体の小屋番が出てきて、ニコリともせず小屋は閉まっていると告げた。私がいくら笑顔をつくり、どれだけ懸命に頼んでも無駄だった。全く取り付く島も無いとはこのことだ。扉の隙間から覗ける部屋はガラーンと広く、ストーブの炎が赤く揺れているのが見えていた。

ケチ!!こんなに部屋が余っているのに!!

ウィンのところに戻った私は次の作戦に切り替える事にした。最初からこんな状況も想定内のことだ。宿が駄目でも私には心当たりがあった。そのために皆に笑われながらも大荷物を背負って歩いてきたのだ。湿原の端からそびえる山の斜面には、三年前少年達にお茶に招かれた牛番小屋があったのだ。山裾に数軒建てられていた牛番小屋は、時おり村人に使われる以外は殆ど空き家になっているような小屋もあったはずだ。

「大丈夫、あそこに泊まろうよ!」

牛番小屋を指差すとウィンはだいぶ躊躇している様子だったが、私は有無を言わず小屋に向かって歩き出した。少年たちにお茶に招かれた時には空き家のようだった小屋の中にはささやかな生活用具が置かれ、チベット服を着た老婆と10歳程度に見える女の子にまだヨチヨチ歩きの子、それに赤ちゃんが住んでいた。放牧シーズンの間ずっとここに滞在して生活している様子だ。

「你好!!私達宿がないの。今晚ここに泊めてくれませんか?」

老婆は首を横にふっていたが、しつこく頼み続けるとモグモグと不明瞭な発音の中国語で少し離れた場所に建っているむこうの小屋なら一人10円で泊まらせても良いと言った。

良かった〜。これで路頭に迷わないで済んだ〜。

ホッとしたのもつかの間、むき出しの地面に、ブリキのトタン一枚で作られた離れの小屋の中は以前ここを使用した者が出した物なのか、酷くゴミが散乱していた。

ええ〜!!これじゃ物置小屋より酷い!こんな場所に泊

ませるのにもお金を取るの〜!?

ゲンナリした気分だった。だが、とりあえず雨風しのげるなら野宿よりましだ。あれこれ迷うほど選択の余地はないし、もうすっかり疲れていた。私はここで良いじゃないかと思ったが、ウインは一目みるなり、こんな人間の泊まる場所じゃない!!と激しく拒否反応を示していた。

「ここが嫌ならどうするの?他に場所が無いんだから仕方ないじゃない!!」

それでもウインは私の言葉には耳を貸さずに、先ほどの道中で出会った女性が、「泊まれる場所がない事もない」と言っていた事を口に出すと、ガンとして他を探すと言い張った。丁度そんな時、山から下りてきたらしい旅行者が数人、道の向こうからやってきて小屋の前を通りかかった。間髪入れずにウインが、この先に泊まれる場所はなかったかと大声で呼びかけると

「あるよ。さっきこの林の奥で、村人から泊まらないかと声をかけられたんだ。」

先頭を歩いていた旅行者の男が答えた。ウインは勝ち誇ったように言った。ほら、やっぱりもっとちゃんとした宿があるのよ。そっちへ行きましょう!!私はしぶしぶ再び重いザックを担ぎあげた。そりゃあ、ここよりもう少しましな宿があるなら、その方がいいけど・・・

私は洛絨牛場からさらに奥の湿原に向かう林の道を歩きながら、訝しい気持ちだった。この道は前回あの宝石の湖を訪れるハイキングの時に歩いているが、そんな宿が建てられるような場所があっただろうか?

二人とも疲れのあまりすっかり無口になっていた。黙ったまま林の中をトボトボと歩いていると、道の奥から人影が現れた。お昼頃別れて以来すっかり姿を見失っていたアーロンとシャオチンが道の向こうからやって来たのだ。

「あ〜!!やっと見つけたよ!! 君たち、歩くの遅いなあ。俺達は何時間も前からこっちに来てただぜ。それにしてもここは綺麗な土地だな!!俺達はこれから稻城に戻るよ」

グッタリしていた私達とは対照的にアーロンは相変わらず快活な調子で言った。

「ねえ、この奥に宿はあった!？」

「ああ、あるある。さっきまでそこでお茶をご馳走になってたんだ。泊まっていけないかと誘われたよ」

「どんな宿だった?汚くない!？」 ウインが尋ねた。

「いや、いい家だったよ。この道をもう暫く歩いていけばあるさ。」

私達はお互いにアドレスを交換し合って別れを惜しんだ。私はアーロンが垂丁を美しい土地だと語った事に少し救われた気持ちになっていた。この二日間のために「旅の同志」というような気持ちが芽生えていたアーロンが、垂丁の本当に美しい部分を見ることなく帰ってしまう事が残念でならなかったのだ。

「これからも連絡を取り合って、ずっと友達でいましょう」

シャオチンが言った。

私達は握手を交わすと、それぞれ別の方向に向かって歩き出した。

私とウインは先ほどのアーロンの言葉に明るい気持ちを取り戻し、足どりも軽くなっていた。。良かった。友達言葉なら信頼できる。あと少しの辛抱だ〜。

しかし重いザックを背負い、杖に頼ってヨロケながら林の中の道を行けども行けども、そんな宿は見当たらなかった。「暫く歩けば・・・」、などという距離は過ぎていくような気が始めていた。いったいどうなっているんだろう。先程の旅行者もアーロン達もハッキリと宿はあると言っていたはずなのに。ずいぶん歩いたところで林が切れ、私達は見覚えのある広場に出ていた。

あ〜!!ここは、花園の広場だあ〜!!

三年前のハイキングで、可憐な花園の中にチベット少年と少女がまるで映画の中から抜け出してきたように寄り添って座っていた、あの広場だ。あの時は絨毯のように一面に広場を埋め尽くしていた野草達は見る影もなく、ただ芝生のような草が生えているだけだったが、広場の中に点在している岩には見覚えがあった。

私は狐につままれたような気持ちだった。この広場から奥の湿原まで岩場の道が続いて家を建てられるような場所は無かった筈だ。ウインはとうとう「もう歩けない」と座り込んでしまった。だが、この時すでに日は傾き始めていた。早くしなければ日が暮れてしまう。暗くなる前に落ち着き場所を見つけなければ、こんな山の中では身動きがとれなくなってしまうのだ。座り込んでいる時間はなかった。

「ウイン!!早く行こう!!」

何度叫んでもウインは私の呼びかけには答えず、見れば

耳に携帯式音楽プレイヤーのイヤホンを差し込んで音楽を聴きながら顔を膝にうずめてうずくまっていた。疲労と不安のあまり、自分の置かれている状況から逃れるためウインは自分の中に閉じこもってしまったのだ。

バカヤロウ!! 遭難する気かよ! こんな時に座り込んでいてどうするんだ。

しかし、こんな状態ではウインを連れて行ったところで足手まといになるだけだ。私は一人で行動する事にした。重いザックはひとまずこの場に降ろし、ウインを花園の広場に残すと、私は身軽になった身体で走り始めた。早く宿を見つけなきゃ! 岩をよじ登り、道を駆け上がる。先ほどまでフラフラだった自分の何処にこんな体力が隠されていたのか自分でも驚いていた。

花園から先の道は、それまでの林の中の道とは打って変わって、道に平行して岩壁が聳えている崖下の岩の道だ。そこから先は神聖な場所とされているのか、道端の岩に経文が書き込まれた色とりどりの布をつなぎ合わせたタルチョが、鳥居のように巻きつけてあった。路頭に迷いかけている心細さも手伝い、薄暗くなりかけた山道でパタパタと風にはためいているタルチョを一人で見ていると、なにか空恐ろしいような気がしてくる。異境にきているのだ・と感じさせた。

タルチョの下をくぐり小走りに道を進んで行くと真っ黒な大きな水牛が数頭、道をふさいでいた。大丈夫、大丈夫。水牛はおとなしいから・・・そう自分に言い聞かせ、緊張しながらそっと水牛の脇をすり抜ける。

崖の縁が大きくくぼんでいる場所に目をつけると、最悪の場合はここで野宿しようと目星をつけた。暫く岩の上の道を小走りに進んで行くと突然視界が開け、そこで唐突に道が終っていた。とうとう奥の湿原まで来てしまったのだ。

その瞬間、私は思わず息を呑んだ。

いつの間にか雲がきれたのか、目の前には大いなる霊峰「央邁勇」が氷河を頂いた岩峰を夕日に照らされて、オレンジ色に輝く姿を現していたのだ。薄く黄色に染まった湿原には澄んだ小川がサワサワと横切り、咲き残っていた高山植物の花の群れが、夕日にてらされてほんのりと輝いている風景はまるで幻を見ているように美しかった。

あまりにも唐突に現れた景色を呆然と眺めているうち



ルオロンニコウチャン ヤンマイヨ
洛絨牛場からみた央邁勇の雄姿 田井光枝撮影
～3年前の旅のアルバムから～

に、涙がポロポロとこぼれ落ちてきた。

あれほど想い焦がれ再訪の喜びに胸を弾ませてやって来た亜丁・・・。だが、村人達の対応は散々なものだった。これまで、アーロンやウインの手前心の中に押し込めてはいたが、私は本当に悲しかったのだ。心の中で大切に温め、何度も思い描いていた美しい亜丁の幻影はここに来るまでに踏みにじられ、すっかり泥に汚れてしまったような気がしていた。

だが、そんな私のちっぽけな感傷など一気に吹飛ばしてしまうほど、やはり亜丁は美しかったのだ。この圧倒的に美しい雄大な自然の姿の前には、人間の営みなどなんて卑小な物なのだろう。人の欲望や喜びや悲しみ、そんなものは最初から超越しているのだ。

この自然の美しさだけは絶対に私を裏切らない。やっぱり私は亜丁を愛してる。今日の一日の終わりにこの風景が眺められた事を、私は神様に感謝した。

(次号に続く)